

最下位脱却へ、官民挙げた観光戦略が問われる

10連休となった今年のゴールデンウィーク。鳴門市の大塚国際美術館は、1日平均の来館者が前年の2.7倍という驚異的な伸びを記録した。

昨年末のNHK紅白歌合戦で、徳島県出身のシンガー・ソングライター米津玄師さんが同館から生中継でヒット曲「Lemon」を披露したのを機に、年明け以降、米津さんのファンらによる「聖地巡礼」が続いている。今年前半の徳島の観光を巡る最大の話題だった。

ゴッホの「ひまわり」、レオナルド・ダビンチの「モナリザ」など、世界各地に点在する西洋名画千点を原寸大の陶板で再現し、人気を集めてきた同館がオープンしたのは、1998年3月。その翌月に明石海峡大橋が開通し、徳島と京阪神が陸路で直結された。

徳島にとって「夢の架け橋」と呼ばれた明石架橋から21年が過ぎた。年々、橋の通行台数は増えている。開通直後の99年は、淡路島を經由して四国と京阪神を結ぶ高速バスは1日92往復だったが、2016年には3倍超の314往復に拡大。輸送人員も2.5倍近くに膨らんだ。

活発化する往来の一方で、徳島は深刻な課題に直面している。宿泊者数が全国で4年連続最下位（観光庁・宿泊旅行統計調査）と低迷している点だ。

架橋による京阪神からの交通アクセスの良さゆえ、日帰りや通過型観光の対象となっているとの見方が強いが、決して要因はそれだけではない。情報発信や国際航空路線の開通などで、他県と比べ出遅れ感もある。

宿泊を伴う観光は、経済効果が大きいだけに、地域の期待は大きい。県も宿泊施設の改修や、夜の観光コンテンツの充実に対する助成制度などを創設した。香港との定期便開設に向け、5月には知事が現地に出向いて交渉に当たった。

こうした取り組みが実を結び、最下位を脱却する日が来るのか。官民挙げての徳島の観光戦略が問われている。

徳島新聞 政経部長 門田誠



大塚国際美術館は、西洋名画等をオリジナルと同じ大きさに複製し展示する、陶板名画美術館として人気を集める